

しかし、彼はその夜のうちに起きて、ふたりの妻と、ふたりの女奴隷と、十一人の子どもたちを連れて、ヤボクの渡しを渡った。32:23 彼らを連れて流れを渡らせ、自分の持ち物も渡らせた。32:24 ヤコブはひとりだけ、あとに残った。すると、ある人が夜明けまで彼と格闘した。32:25 ところが、その人は、ヤコブに勝てないのを見てとって、ヤコブのものつがいをつ打つたので、その人と格闘しているうちに、ヤコブのものつがいはずれた。32:26 するとその人は言った。「わたしを去らせよ。夜が明けるから。」しかし、ヤコブは答えた。「私はあなたを去らせません。私を祝福してくださいなければ。」32:27 その人は言った。「あなたの名は何というのか。」彼は答えた。「ヤコブです。」32:28 その人は言った。「あなたの名は、もうヤコブとは呼ばれない。イスラエルだ。あなたは神と戦い、人と戦って、勝ったからだ。」32:29 ヤコブが、「どうかあなたの名を教えてください。」と尋ねると、その人は、「いったい、なぜ、あなたはわたしの名を尋ねるのか。」と言って、その場で彼を祝福した。32:30 そこでヤコブは、その所の名をペヌエルと呼んだ。「私は顔と顔とを合わせて神を見たのに、私のいのちは救われた。」という意味である。

親切丁寧に教え導く様、行き届いた世話をする様、付きっ切りや側にいて指導する様を「手取り足取り」と表現します。皆さんは誰かから、勉強やスポーツや仕事や趣味や社会習慣などを手取り足取り教わったことがあるでしょうか。あるいは、誰かに何かを手取り足取り教えたことがあるでしょうか。普通に考えれば、誰でも若い頃は教わり、経験を積んでからは教える立場になります。

では、神と信者の関係はどうでしょうか。人間同士の場合と違い、どんなに経験を積んだ信者でも、神に何かを教える立場には決してなりません。その逆に、神は経験豊かな信者さえ手取り足取り指導します。特に旧約聖書の時代、神はしばしば人間の姿で信者に現われ、手取り足取り指導しました。今日の箇所では、ヤコブが根気強く祈る大切さを、神から文字通りに手取り足取り教わります。私たちもヤコブといっしょに、神から手取り足取り教わりましょう。

I. ヤコブには祈る必要がありました

今日の箇所の正しい理解のために、創世記 25 章 19 節から 32 章 21 節までの粗筋を思い出しましょう。ヤコブはイサクとリベカ夫妻に生まれた双子の弟で、兄の名前はエサウです。この人々の社会では、長男が父親の相続人になることが当然でした。そして、イサクの相続人になることは財産の相続人だけでなく、救い主の直系の先祖になるという神の祝福の相続人になることで、そちらの方が重要でした。しかし、二人がまだ母親の胎にいた時、神はリベカに「兄が弟に仕える。」と告げました (創世記 25:23)。つまり、弟が相続人になると告げました。それは兄が罪人で、弟が義人だったからではありません。神のきよさの基準によれば、二人とも罪人でした。唯一の違いは、弟には神の祝福を大切に思う信仰がありましたが、兄にはありませんでした。兄は空腹を満たすために豆スープ一杯と長男の権利を交換するほど、神からの祝福を軽蔑していました (創世記 25:29-34)。「全人類の救い主をアブラハムやイサクの子孫から生まれさせる。」という神の遠大な計画を成し遂げるためには、エサウのような不信仰な人を相続人にすることはできませんでした。

ところが、ヤコブは神が正しい時期に、正しい方法で相続の権利を授けるまで待てませんでした。イサクがエサウを相続人にしようとしたので、母親と共謀してエサウに成り済まし、視力が衰えて良く見えなくなっていた父親をだまし、まんまと相続人としての宣言を受けました (創世記 27:1-30)。人間は失って初めて、失ったものの価値の大きさを知ることがあります。エサウも豆スープ一杯と交換するほど相続人の権利を軽蔑していましたが、いざ失ってみると、あきらめ切れませんでした。そして、その気持ちは弟に対する敵意と憎しみと殺意に変わりました。エサウは父親が死んでからヤコブを殺すつもりでした (創世記 27:30-41)。そのことがリベカに伝わったので、彼女は「同じ信仰を持つ結婚相手を探すため」という理由を付けて、ヤコブを自分の実家に逃がしました (創世記 27:42-28:5)。それは後悔と悲しさと寂しさに満ちた約 600 キロの一人旅でした。

その旅の最初の夜、神は野宿していたヤコブに現われて、「あなたがどこに行ってもあなたと共にいて、あなたを守り、必ず故郷に連れ戻す。」と約束しました (創世記 28:15)。それはヤコブにとって大きな慰めでした。しかし、神はヤコブの罪に目をつぶって、甘やかすつもりはありませんでした。神はヤコブが自分の罪によって引き起こした苦難を、ヤコブの信仰をきよめ、強め、訓練するための機会として用いました。ヤコブはすぐに帰国できると思っていたようですが、神はヤコブに 20 年の訓練を課しました。その訓練の期間、ヤコブが実の伯父にだまされて苦しんでも、神は助けを差し伸べないこともありましたが、そうすることによって、ヤコブに父親をだました罪を悔い改めさせました。その一方、ヤコブに多くの家族やしもべや家畜を与えました。またヤコブが命の危機に直面した時には、ヤコブに危害が及ばないように守りました。ヤコブはそのような訓練を経て信仰的に成長し、自分の知恵や力ではなく、神の助けや導きに信頼するよう変えられました。それは、ヤコブが正式にカナンを相続する時が来たことを意味しました。それで、神

はヤコブを帰国させました（創世記 29:1-31:55）。しかし、故郷が近づいた時、エサウが 400 人の家来を連れて出迎えるに来ると聞き、「もしかすると、兄はまだ私のことを怒っていて、復讐するつもりかもしれない。」と不安になりました。それで、家族やしもべや家畜をヤボク川の向こう側に渡らせ、自分だけがこちら側に残りました。もしもの時に少しでも多くが助かるためでした。神はその時のヤコブに助けが必要なことを分かっていた。

II. 主は根気強く祈るようにヤコブを訓練しました

けれども、神は簡単には助けを差し伸べませんでした。むしろ、おもしろい方法で、「不安に負けないで、わたしの助けや支えや導きを根気強く祈り求めなさい。」と教えました。詳しい経緯は書かれていませんが、神は人間の姿でヤコブに現われ、彼と格闘しました。この格闘は相撲やレスリングと訳されることもあります。どのようなものかはっきり分かりませんが、組み合って戦ったことは間違いありません。しかし、神の意図を誤解しないようにしましょう。神はヤコブに、エサウと決闘するためや 400 人の兵士と戦うための武術指南をしたのではありません。「格闘のわざを身につけて恐れを克服しなさい。」と教えたのでもありません。

神は敢えて人間の姿で現われ、身分を明かさずにヤコブと格闘しました。いや、組み合う機会をヤコブに与えました。もし相手が神だと分かっていたら、ヤコブは恐ろしくて組み合えなかったはずで、そうなったら、この個人授業の意味がなくなってしまいます。そうならないために、身分を明かさなかっただけでなく、神は最後の瞬間まではヤコブがしかける格闘を受け止めるだけでした。それはちょうど、日本の相撲の稽古で横綱が若手に胸を貸すことに似ています。この稽古の時、横綱は先ず若手の攻撃を受け止めます。横綱は防御一方ですが、弱いではありません。若手の攻撃を受け止める余裕があるのです。そして、最後の瞬間で相手をかわしたり、投げたりします。

神も最後の瞬間まで反撃しませんでした。ヤコブに力の続くかぎり格闘をしかけさせました。そうさせることによって、神は祈りにおいてもそれと同じような熱意や根気強さが必要なことをヤコブに教えようとしたのです。神はそのことを、文字通りに、手取り足取りヤコブに教えました。手や足を取り合う格闘によって教えました。このように、神はおもしろい方法でヤコブに大切な真理を教えました。これもヤコブの信仰の訓練の一環でした。ヤコブはこの格闘で、あきらめないうで祝福を求める熱意を神に示しました。神はそれを「ヤコブの勝ち」と認めました。いよいよこの個人授業も終わりに近づきました。それでもヤコブが離れようとしなかったため、神はヤコブのものの関節を打って、はずしました。

III. 主の確約はヤコブを動かして、根気強く祈らせました

神はヤコブのもとを去る前に、二つのことをしました。一つは、「私はあなたを去らせません。私を祝福してくださらないければ。」というヤコブの祈りを叶えました。神がここでヤコブに与えた祝福は、この世的な祝福ではありませんでした。エサウの 400 人の兵士に対抗する兵士を備えることではありませんでした。神は「あなたの名は、もうヤコブとは呼ばれない。イスラエルだ。」と祝福しました。もし私たちがこの箇所を読んで、「この祝福はヤコブの恐れを取り去るのに十分ではない。ヤコブはエサウの復讐と 400 人の兵士の襲撃を心配しているのだから、それに対する具体的な助けを約束すべきだ。」と感じるなら、私たちはまだまだ神のみこころを理解できていません。

神がヤコブにイスラエルという名前を与えたのは、単なる気休めではありません。イスラエルという名前は、「神と戦い、人と戦って、勝った。」という意味です。もしヤコブがエサウの手によって殺されてしまうなら、新しい名前をもらう意味がありません。ヤコブの子孫が増えてイスラエル民族になり、その中からイエスが生まれるのだからです。ヤコブが生きてこそ、イスラエルという名前は意味があります。つまり、ヤコブに新しい名前を授けたことは、「私はあなたが故郷を逃げ出し最初の夜に約束した通り、あなたを必ず守り、あなたをカナンに連れ戻し、あなたとあなたの子孫にカナンを与える。」という神の確約なのです。ヤコブはその祝福があまりにも大きかったので、目の前にいる人が誰であるかをうすうす気づきましたが、「どうかあなたの名を教えてください。」と尋ねました。その人は名前を教えませんでした。ヤコブはその方が神であることを確信したので、その場所をペヌエルと名付けました。その意味は、「私は顔と顔とを合わせて神を見たのに、私のいのちは救われた。」です。詩篇 50 篇 15 節にも「苦難の日にはわたしを呼び求めよ（わたしに祈れ）。わたしはあなたを助け出そう。」と書かれているように、主の助けや支えや導きなどの祝福の確約が、私たちクリスチャンを熱意ある根気強い祈りへと動かします。

イエスも熱意ある根気強い祈りの必要を弟子たちに教えました（ルカ 11:5-13 ; ルカ 18:1-7）。私たちも、神から直接ではないにしても、聖書や何らかの試練を通して、熱意をもって根気強く祈ることを手取り足取り教えられています。創世記 33 章を読むと分かりますが、ヤコブは神の支えによって恐れと不安に打ち勝ち、信仰的に成長した謙虚で、そして誠実な態度でエサウの前に出て、和解できました。神はヤコブとエサウの関係を、ヤコブが想像できない方法で見事に解決しました。ですから、私たちもヤコブのこの体験を忘れないで、日々の生活の中で熱意をもって根気強く神に祈りましょう。神はご自身が良いと思う時に、良いと思う方法で、私たちにも助けや支えや導きなどの祝福を与えます。